

中世の酒屋と墓

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



中央に並ぶ埋甕群と、右下に土葬墓が見える

はじめに 2008年5月から9月にかけて、烏丸通と綾小路通の交差点を約50m西に入った場所で発掘調査を実施しました。調査地周辺は現在、オフィスビルや商業施設の立ち並ぶ繁華街ですが、中世京都においても商業の中心地として栄えた場所にあたります。

今回の調査でも、中世京都の経済基盤を支えた酒屋跡と考えられる埋甕群や地下式倉庫など、多数の遺構が見つかっています。

また、鎌倉時代から室町時代の土葬墓と考えられる遺構が見つかりました。この土葬墓には特徴的な副葬品がみられることから、当時の街なかでの埋葬にも触れてみ

たいと思います。

酒屋跡の埋甕群 14世紀前半と15世紀後半の2時期の酒屋跡と考えられる遺構を発見しました。古い時期のものは、東西6列、南北6列に常滑焼の甕が整然と並んで据えられていました。甕の底は棒状のもので故意に穴を開けられていました。穴が数箇所におよぶものもあります。新しい時期のものは、東西2列以上、南北6列に、甕の抜き取り穴が並んで見つかりました。室町幕府の政所代を代々世襲した蜷川家文書の『土倉酒屋注文』には、応仁の乱以降の下京酒屋として「綾小路烏丸西北類」に、「澤村又次郎」という酒屋が

記載されています。時期的に見ても、見つかった甕抜き取り穴群がこの酒屋のものである可能性が高いと考えています。

土葬墓 土葬墓と考えられるものは全部で9基ありました。特に残りの良かったものは、綾小路通から北に25mほどのところで見つかりました。規模は、東西約2.2m・南北約1mの長方形で、底部の壁際には横板を留める木杭を打ち込んだ痕跡があり、壁が板壁構造になっていたことがわかります。上層は炭を多量に含む土で埋められ、下層には数百枚もの土師器皿が正位置に置かれていました。土師器皿の中には灯明皿として用い



室町時代の土葬墓



埋納されていた器や鉄製の刀

られたものも数点見受けられました。中央には青銅製の鍋と鉄製の蓋が置かれ、その横からは桃の種が出土しています。東端の頭部付近と考えられる場所には、中国製の白磁皿が置かれていました。南壁際では鉄製短刀が斜めに傾いた状態で出土しました。その他に、漆器皿や水晶製の数珠玉やガラス小玉、銅銭などが出土しています。

副葬品から推察する 今回の調査で見つかった他の8基の遺構も、この墓と同様に以下のような特徴を持ちます。

表通りから奥まった町屋の裏側に築かれる。

平面方形で壁板を杭留めする。

多量の土師器皿を正位置に据えて入れる。

埋土に炭層が認められる。

鉄製短刀あるいは小刀を入れる。

完形の輸入陶磁器を入れる。

こうした特徴を持つ土葬墓は、過去の調査でも見つっていますが、分布は今回の調査地周辺に限られます。

調査地周辺では、室町時代のはじめころになると町々の自治的結合の象徴である祇園会山鉾が多く出されました。そうしたことから、墓に高級輸入陶磁器や金属製品などを埋納したことは被葬者の財力を示し、多くの人が葬送に関わったことを物語る多量の土師器皿の

埋納は、地縁的なつながりの深さを示すものではないかと考えられます。

おわりに 平安時代以前には、位の高い貴族であっても墓が築かれることは稀で、多くは鳥辺野や蓮台野といった共同葬送地に葬られました。中世になり、街なかにかような墓が築かれるようになったことから、葬送に関する人々の認識が大きく変化したことがわかります。しかし変化の具体的な要因はよくわかっていません。現代にも受け継がれる葬送儀礼の解明に向けて、街なかのお墓に注目し続けたいと思います。

(柏田 有香)



水晶製の数珠玉やガラス小玉



中世の通りと調査地および山鉾の位置